

不登校の息子を持つある母親との面接過程

The process for consulting a mother whose son is in non-attendance at school

原田唯司

Tadashi HARADA

はじめに

本報告は、中学校入学後しばらくたってから不登校状態となった長男を持つ母親との継続面接の過程をまとめたものである。本クライアント（以下CIと表記）は面接の過程で、長男との関わりのあり方や内面的世界の理解の仕方に視点の転換が生じ、長男の不登校を含めて自身が抱えているさまざまな課題を整理し、それらの解決に向けて前向きに取り組もうとする心構えができるようになった。そこで、CI自身が抱えている諸問題に対する認識の変化の様相を跡づけながら、母親としての自分と長男との間の適切な心理的距離を探し出すことの意味や、本CIをはじめとして中年期を生きる女性が遭遇する可能性のあるさまざまな困難な課題への対処の仕方、さらにそうした人生上の課題に直面して苦しみやつらさを感じている来談者を支える面接者（以下Coと表記）の役割などについて考察する。

事例の概要

- (1) 来談者：女性，47歳，有職。
- (2) 主訴：長男（12歳，中1）の不登校
- (3) 家族構成：本人，長女（20歳，大学3年生），長男（12歳，中学1年生）
- (4) 面接の期間・回数：200x年6月27日～200x+1年7月10日（インテーク面接1回を含む）。本面接は12回。

(5) 問題の状況：前年の4月の夫の自殺をきっかけに長男（当時小学6年生）が登校をしぶりだした。その後担任教師や級友たちの援助によって何とか登校を続けていたが、自宅の差し押さえの関係で転居を余儀なくされた秋口より断続的な不登校を繰り返し、中学入学後はしばらくの間登校を続けたものの、5月の連休明けより一切学校に行かなくなった。

CIは来談するまでのここ1年ほどの間、夫の自殺とその後始末、さらには夫の実家との確執といった精神的に多大なストレスを発生させる事態に直面してきた。それらが決着を見ないうちに長男の不登校の問題が重なったせいも、来談当初は精神的にも肉体的にも相当に追いつめられているような印象を受けた。体格が小柄であることにもよるが、謙虚でおとなしく、自己を主張するタイプではなく、いわゆる家事に仕事に奮闘するといった“強い母”というイメージではない。

(6) 来談に至るまでの経緯：長男は中学校の入学式から10日間ほどたった頃より登校時に腹痛や下痢といった身体症状が出現し始めて、だんだん登校することができなくなり、5月の連休明けから一切登校しなくなった。その間CIは、中学校の担任教師や養護教諭と頻りに連絡を取り、面談するなどの努力を重ねるが、長男の不登校状態に変わりはない。

ら病院でのカウンセリングを勧められたこともあって、CIの知り合いを通して精神科単科病院の医師に相談したところ本相談室を紹介され、直ちに長男ともども来談することとなった。

面接の過程

以下に12回の面接の過程をCIの自分自身に向けられた課題に対する意識化の程度によって4つの時期に分け、長男の言動や様子に関する情報も織り込みながら報告する。なお、「」はCIのもしくは間接的にCIから得られた長男の発言、〈〉はCoの発言を示す。

【第1期 とまどいと混乱（第1回～第3回）】

第1回（200x年7月11日）

夫は周囲の反対を押し切って5年前に脱サラをして新しく会社を立ち上げたが、2年ほど前から次第に資金繰りが悪化してとうとう会社が倒産し、多額の負債を抱えたまま来談約1年前の4月に家族を残して自殺した。CIは「泣いているヒマもなく」、残された借金の返済のために再び働き始めた。生命保険金もほとんど得られず、債権者との交渉や会社の後始末、弁護士との相談などがCI一人の肩にのしかかり、「よくノイローゼにならずにこれまでやって来たと思う。」ほどに苦しい日々を送って来た。

警察からCIに夫の死の連絡があり、CIは長男にその事実を伝えると、長男は泣き出してひじょうに動揺した様子であったが、一方CIをなぐさめるような発言も行った。その後の葬式の当日には、他の人が取り乱していたのに対して、長男は冷静なそぶりを見せ、かえって祖父に対して「おじいちゃん、泣かないで。」などと気丈な振る舞いを見せていたのが印象に残ったという。その後長男はお盆を過ぎる頃から次第に元気がなくなっていくように見え、それでも2学期の最初は休むことなく登校していたが、自宅が差し押さえの関係で10月に学区外のアパートに引っ越した（学校の特別な計らいで在籍校にそのまま通学）頃からだんだん学校を休みがちになり、早退することも多くなった。また、身体症状（頭痛や腹痛）が伴い始め、週に1日程度しか登校できないようになった。

この時期長男はCIに、「授業に集中できない。周りが騒がしいのが煩わしい。」「むなしい。なぜ5年間通った同じ道を通えないのか。」などと自分のこころの中にある苦しみを訴えていた。立ち退きを迫られたことについてはCIから事情を説明したが、「引っ越したくなかった。」などと言うのみであった。また、夜中に父親や手放さざるを得なかった飼った犬の写真を取りだして泣いていたことがあり、TVで火葬場のシーンがでてきたときに、顔色が真っ青になり、冷や汗をかき、ふるえ出すこともあった。CIによれば、「夫の死の当時の長男の様子よりも、こうした印象の方がきつい気がする。」という。

長男は父親とは大の仲良しで、日曜日のたびごとに釣りに出かけたり、犬の散歩に一緒について行ったりしていた。今でもCIに「パパが叱ってくれば僕は学校に行ける。」などと言う。逆にCIに対しては「アンタ」呼ばわりをしたり、「パパの足下にも及ばない。」などと否定的な言葉を出す。CIはたいへんな思いをして家族の生活を支えているのは自分であるという思いもあることから、こうした長男の母親像には反発といらだちを覚えるが、その気持ちを長男に面と向かって表出することは避けている。

CIに対しては、概ね〈大好きだった父親が突然にいなくなってしまったこと、しかも本人にとってあまりに理不尽な理由による父親の死の衝撃からお子さんはまだ立ち直っていないよ

うに思われる。>と伝え、自分を支えていたものが急に取り外されてしまったことによるやるせなさや無力感、自責の念といったような感情が長男のこころの奥底にあることを母親としてできるだけ理解しようとするようにという趣旨の助言を行った。

第2回 (200x年7月25日)

母親から見て長男の性格や行動をどのようにとらえているかを尋ねたところ、言下に「幼稚ですね。自分の我を通すまでだだをこねる小さい子のようにです。」と述べ、CI自身の懸命な努力に引き比べて学校にも行かず家で無為に過ごしている長男の姿を否定的に見たり、情けない思いを持っていることを伝える。また、「がまんしてられない。」「集中できない。」ところが目立つとも述べ、全体として年齢相応の自我の形成が不十分で、幼さを多分に残していることへのいらだちやもどかしさを表出している。さらに、家庭でのCIとの話題はテレビゲームやマンガ、食べること、野球くらいで、「それ以外のことは頭の中にはないです。」と断言的口調で述べて、幼稚な息子というCIの長男に対する否定的なイメージがかなり強固であることをうかがわせた。

CIは、長男が断続的不登校から不登校状態となった4月から5月にかけて、担任と頻繁に連絡を取ったり、面談に出かけたりして、事態の解決のために能動的に行動してきた。しかしながら、CIも長男も担任のことを嫌いではないが、あまりに一生懸命で熱心過ぎて、話が担任からの一方的内容に終始することが多く、せっかく同席しても長男は無言でいるか途中で席を立つしかなく、CIも黙るしかないような状況であったという。その上、長男を“こころの病”とか“お父さんが亡くなったから学校に来れない”などと独り決めしているようなところがあるので、一度「少し勘違いしてませんか？」と担任の言動を批判したらその後はあまり連絡をして来ないようになった。その過程で、長男が望んでいた野球部への入部に関して、担任が勝手に気を回して無理であることを長男に告げたという事実が発覚し、CIは担任をはじめとする学校側の姿勢に強い不信を感じるとともに、入部がかなわなかったことが長男の不登校の一つの原因であるという見方を持つようになった。

長男には小学校時代から仲の良い友だちが4人ほどいて、たまにはあるが家に遊びに来たり、電話し合ったりしている。そのうちの一人に釣りに誘われて一緒に出かけたが、長男はキャスティングを一回もすることなく、ただその子の後ろで見守っているだけだったという。CIの目から見て長男は友だちにとっても気を遣っているように見え、部活や試験などで相手が忙しかったりするとこちらから電話もかけないようにしているし、ただひたすら相手から電話が来るのを待っているようなところがある。CIはこのような長男の友人に対する関わりの仕方を指して、「自ら退くような感じ」と形容している。

Coは、長男の不登校に対して母親として何ができるのかをCoとともに考えるのがこの面接の場であること、その中で長男の家庭での言動の様子や家族や友人との対話や交流の様子などを母親の目という観点から話題として出して欲しいこと、また、CI自身が抱えている悩みや課題についてもこの場で遠慮することなく表出してかまわないことなどを伝えた。

第3回 (200x年9月4日)

長男が初めて単独で相談室を訪れた日(8月1日、本人面接の第3回目)の様子から語り始めた。行く前に本人は来るのをいやがっていたが、母親に励まされて結局1時間早く到着。

“相談室”に着いてからも母親に「帰ってもいいか？」と電話するなど、乗り気ではなかった。しかし、第3回面接終了後しばらくの間（1週間くらい）は元気な様子で、家の手伝いをしたり、早起きするようになった。

8月下旬に休みを取ることができたので、長男に旅行を提案したところ、長男は迷わず「四国に行きたい。」と答え、旅程の具体的な計画は長男が立案した。四国はかつて家族4人で旅行した先であり、思い出の土地であった。旅行中、S川の橋の上から河原でバーベキューをしている家族を見ていたときの表情がとても寂しそうで、CIの印象に強く残った。また、父親を「あの人」と呼び、空を指して「あの人（父親）が学校に行けない元凶である。」と言うようなこともあった。

CIは、今回の旅行を通して長男に対して「新しいことに対する緊張感が強い子です。」ともとらえるようになった。たとえば「飛行機に初めて乗ったときなど明らかにそれとわかるほど硬直していたし、新幹線以外の乗り物に乗ったときには必ず酔っていた。」。CIは長男が「どうしてあんなに緊張しなければならないのだろうか？」と思い、これまでの長男とは異なる新しい面をあらためて発見した気がしたという。

やや突き放したような言い方が気になり、また「幼い子」「緊張感が強い子」というこの時点におけるCIの長男のとらえ方にはいずれも否定的なニュアンスが伴っていたので、Coはく本当に体調が思わしくなかったのかも知れないが、長男なりに今度の旅行を意味づけていて、かつて家族そろって旅行に出かけたという思い出の場所で、父親はもういないということをあらためて自分の気持ちの中で確認しなければならなかったのではないかと、ふだん以上に緊張していたように見えたのではないかと述べた。するとCIはしばらくの間考えつつ、やがて同感したそぶりで、「今思えばそうだったのかも知れませんが、でもそのときには、長男の世話の方がたいへんで、とてもそのようなことを感ずるゆとりはありませんでした。」と語る。

Coには、長男の不登校だけでなく、夫の死以降直面せざるを得なかったさまざまな困難な課題に対してCIは誠実に対応して来てはいても、やはりまだ夫の死から受けた心理的な衝撃や傷つきが癒えていないことやこころの奥底には引き続いて夫に対する哀惜の念や愛着と恨みのような対となる感情が横たわっていることが感じられ、CIはいまだこころにゆとりがなく、混乱と動揺のただ中にあるように思われた。一方、面接の回を重ねるにつれて、長男に対するCIの素直な感情が次第に表出されるようになり、また、面接過程で取り上げられた数々の話題に対するCI自身の認知や感情、評価なども比較的自由に語るできるようになったことから、本面接の場をCI自身が自分の思いをストレートに表現できる機会として位置づけていることを感じ、今後とも定期的に面接を続けていくことを提案した。

【第Ⅱ期 長男理解の進展と自分の関わりの振り返り（第4回～第6回）】

第4回（200x年10月3日）

前回に引き続き、夏休みの旅行について語り始める。今の時点で今回の旅行について振り返ってみると、長男の希望で昔の家族旅行の思い出の土地へ出かけたことや長男が普段になく緊張した様子であったことなどを、そのときに長男なりに内面で感じていたことが今になってよくわかるような気がするという。そして、「もしかすると自分も娘もこの子の本音が現れるのを待てなかったのかも知れませんが。」「夫の死以降これまでの間、自分が長男のことを仕切っ

てしまっていたように思います。」「自分が長男自身の代わりに口を出すことで、長男が伸びていくはずのところをかえってそいでしまったのではないかと感じます。」などと、問わず語りに、これまでの長男との関わりの持ち方についてのCIとしての思いを語り始めるようになった。さらに、「学校に行けないこと自体が長男にとって大きなプレッシャーとなっていたところに、自分も娘も長男に対してきつい言葉をかけたり、厳しい態度をとったり、いろいろな要求を突きつけてきたことが、長男をよりいっそう追いやってしまったのではないかと思います。」と、自らの反省の意を込めて、また自分に言い聞かせるようにしてこれまでの長男に対する姿勢を振り返る発言が相次ぎ、長男の心根を理解しようとする兆しが見え始めた。

CI自身が抱えている問題についても、まだ夫の会社の残務整理が完全には片づかずに、忘れた頃になって債権者からの電話が自宅にかかって来ること、会社の整理の問題はこちらで弁護士を立てているので直接債権者と対話する必要はないのだが、電話がかかってくる以上は応対せざるを得ないので、そのたびごとに申し訳ないという気持ちと法的には決着が付いているはずという気持ちとの板挟みにあつて苦しい思いをすることなどを、訥々としかししっかりと口調で語ってくれた。さらに、夫の親からこれまでに何度か一緒に住もうとの提案があったが、CIとしては法事からみのことで先方に不信感を持っていることを理由に気乗りがしないこと、しかし転居することが長男にとって転機になるかも知れないという期待もあつて、正直考えあぐねていることなども説明してくれた。

債権者からの電話は昼間にかかることが多く、これまでは長男が対応することが多かった。先日もしばらくぶりに電話があつたときも長男が受けたが、その日の夜その旨を長男がCIに伝えたとき、「ママが怖がるほど恐ろしい人ではないよ。そんなにびくびくする必要もないよ。」と言い添えたそうである。また、CIの誕生日に、知らないうちに貯めた小遣いを使ってささやかなプレゼントをしてくれたというエピソードも紹介してくれた。CIはこうした一連の長男の言動や態度を述べつつ、長男の優しさや母親に対する思いやりの気持ち、娘（姉）と比較してCIを守るかのような行動に、このところあらためて気づかされるようになったという。Coはくおさんのよい面についてのお母さんの話を聞いたのはおそらく初めてだと思います。おそらくこれまではお母さんから見ておさんの悪い面や否定的なところにまず目が向かうことが多く、優しさや思いやりなどもともとおさんが持っていた特徴を見失っていたのではありませんか？>と問いかけると、CIは頷いて「そのとおりかも知れません。」と述べ、続けて「9月以降、2人で一緒に行動したりすると“強さ”みたいなものが出てきたと感ぜます。」と少しほほえみを浮かべつつ語った。

第5回（200x年11月7日）

夏休み以降、娘と同級の大学生に週1回家庭教師に来てもらっている。長男は当初は気乗りしない様子だったが、このごろは楽しみにしているようで、予習や復習をきちんとこなし、家庭教師自作の数学の練習問題を一生懸命にやっている。また1回のうち30分以上は、公園でキャッチボールをしたりファミコンをしたり、楽しく遊んでいるなど、長男が年長の同性との交流を楽しみにしている様子が語られる。

また、先週長男の友だちを送っていった帰りに、「しばらく『故郷』に入っていないから、行ってみるかな。」と言い出し、CIが「行きたくない。」と答えたところ、「ママはこだわりすぎ。僕は前に進みたい。ママはいつまでも引きずりすぎだ。開き直った方がいい。」と言われ、

CIはとても驚いたという。さらに、「ママのように引きずっていると、僕は前を向いて行けない。引きずるのをやめるのが無理ならば、肩の荷を下ろしてそばに置いたら？」とも言い、これら一連の長男の言葉からCIは長男の成長ぶりを実感した。CIは、「自分はこれまでも反省や過去を振り返ることが多く、またいろいろなことが現在もわき出している状態にあるが、それに比べて長男は強くなっていると思うし、また、頼りになってきた。自分だけが置いて行かれるような気がするようになって来ました。」と述べている。

CIは、「1日1日をムダに過ごしているように見えるが、あの子はあの子なりに違って来たな、何か考えているんだなと思うようになりました。」「長男が学校に行かないからこそ、彼の少しずつの成長を見守って行くことができると思います。」「娘の時よりも長男の成長を感じ取ることができるような気がします。」「小学校時代の担任の先生に『お母さんも成長されましたね』と言われ、素直に嬉しく思います。」などと述べ、長男だけではなくCI自身も、今回の長男の不登校をきっかけとしてさまざまな思いや苦しみを経験してきたことが、自分自身の心理的成長を促したという実感を持つようになっていく。

さらにCIは、「今度のことがなければ、ただがんばるお母さん、突っ走るだけの自分ではなかったと思います。長男が学校に行きたいと言いつつまではそのままにしたらいいよと言えるようになりました。」「肩の荷を下ろしている自分を見守る自分を意識できるようにもなりました。」と最近の心境について語った。また、母親の古い友人で同じように子どもの不登校を経験した人から、「自分は子どもが不登校だった5年間にいろいろなことを学ぶことができた。いろいろハンディがあると思うが、ほかでは得られないものをいっぱい得たと思うようになるよ。」とアドバイスされたこともあり、「自分一人ではないことがわかりました。長男自身も学校を休んでいなければ気づけなかった面を経験していると思います。不登校ということで失った面もあると思うが、決してマイナスだけではないと思います。」と述べている。

またCIは、長男の行きしぶり・不登校が生じてからのこの1年間を、「子どもたちの強さを教えられた1年でした。子どもたちをよろしくではなくて、子どもたちによろしくの1年でした。」とも述べ、夫の死のショックに苦しむ母親に対して、「子どもたちからいつまでもめめめそしてはいけないというメッセージが送られたんだと思っています。子どもたちがそれぞれのやり方で自分を支えたのだと思います。子どもの姿を見ながら自分は後をついていった、そういうように思える自分になって行きました。」というように、自らと子どもたちとの間の関係の再解釈を行い、この間の経験が母親自身にとって積極的な意味・意義を持っていることを見いだしている。

最後にCIは、「このようなことを話せる自分を発見してよかったと思います。」とも述べ、これまでの一連の面接の過程で、CI自身が冷静に経過を振り返りつつ、自分と長男との関係を深め、長男の現在の姿を受け入れるとともに、母親自身の自己の再評価・再価値付けを行い始めているように思われた。

第6回 (200x年12月12日)

11月30日に中学校から、担任が交代したのでその紹介と長男の様子を聞きに来るために家庭訪問したいという連絡が来た。最初は知人の家で面会することを学校側は要望していたが、CIとしては何か特別な扱いをされているようで割り切れない気持ちであったので、家に来てもらうことを希望した。そのことを長男に告げると最初は動揺し、「誰とも会いたくない。」と

言っていたが、本人が継続面接のために相談室に出かけて帰った頃には、朝とはうってかわって朗らかな様子が見られた。また、ここ1ヶ月くらいの面接の様子を明るくCIに話してくれた。

12月5日に中学校の教務主任と新しい担任とが2人で家を尋ねてきた。長男は「先生、働き過ぎじゃない？」とか、「テスト持ってきてもいいよ。」などと軽口をいうなど、明るく話をする事ができ、CIとしても少し安心した。その後時々担任がテストを持ってきたり、様子を見に来ているようであるが、本人はそのたびごとに先生と会話ができて、もらったテストもやってみたりしている。CIから見ても先生と普通に会えたことでとても嬉しそうで、その喜びを全身で表現していた。張り切って先生にお礼を言うなど、9月の頃にはとても考えられなかった態度だとCIは感じている。

また、先日2ヶ月ぶりに小学校時代の友人が訪ねてきて、映画を一緒に見に行ったり家に泊まったりした。小学校時代のケンカ相手でもあったのだが、久しぶりに友だちと遊ぶ長男の様子を見て、CIは「互いにかまんでできるようになったんだなあと思います。」と述べ、子どもの少しずつの変化を素直に喜ぶ気持ちになっていることを表している。

最近父親の様子をよく聞きたがり、「お父さんは僕のことをどう思うか思っていたのかな?」「僕を必要と思っていた?」などと話しかけて来る。以前(今年の春休み頃、中学入学前)は、「パパは僕たちを生かすために死んだ。」とか「命と引き替えに僕たちを救ってくれた。」などと父親を高く評価していたが、今回は父親に対して、「男として責任を取らないんだよな。」「かわいがってくれたのに、最後はこれじゃあねえ。」などと突き放したようなものの言い方をするようになって来た。12月9日にそんな話をして、これまで美談的に父親のことを語っていたのが、客観的に見る事ができるようになったとCIは長男の変化を受け止めている。線香をあげることもしないし、CIから見ても長男は父親に対して「クールになった。」と感じている。

大好きだった父親、思い出に残る父親、理想化された父親、家族のために働いていた父親像から、家族のことを考えずに勝手に死んでしまった父親として距離を置いて冷静に見つめる対象となるというように、この時期の長男に父親像の再構成に向かっている姿を認めることができる。CIもこうした長男の変化について前向きに受け取ろうとする構えができ、父親との距離を置き始めていることをCIとしても肯定的に理解しようとしている。

一方、夫の残した会社の残務整理がまだ終了せず、債権者との間でまだ問題が片づかない状況が続いている。また、続けて「自分(CI)の実家からも戻ってきた方がよいとも言われていますし、仕事についても身体的に疲労が蓄積するのでどうしようかと考え始めています。娘が就職するまではこちらにいたいとも思うのですが・・・。」とも述べ、自分自身および家族に関わる課題を整理し始めている様子がうかがえた。

【第III期 長男の「後退」と新しい出発の自覚(第7回~第9回)】

第7回(200x+1年2月13日)

年末から年明け後の長男の様子について、「冬休みが終わった頃からまるで潮が引くように家に閉じこもりがちになり、落ち込んでいるようです。」と述べる。年明け早々に長男が大切に飼っていたモルモットがCIのミスが原因で死んでしまい、長男は相当取り乱して、「昼間また自分一人になってしまう。」と言って動揺した様子を見せ、CIに対して「どうしてそうク

ルなの？」などといって責める口調であった。

また、「なぜ僕を生んだのか？本当はお母さんにとって僕はじゃまなのか？僕は必要のない人間だ。ダラダラと家にいるだけだ。」などと眉間にしわを寄せ、下からCIをのぞき込むようにして言う。CIを部屋にも入れないし、昼夜逆転の生活に戻ってしまった。先の主旨の発言は6年生の3学期頃（学校に行けなくなり始めた頃）にも、今年の5月頃（中学校を不登校し始めた時期）にもあって、その後はそうした発言はなかったが、また復活してしまったかと思う。いつもは遊びに行くことが多い近所のおばさんの家にも出かけようとしないし、長男が自ら始めたサイクリングにも行かなくなっている。家庭教師とはこれまで通り半分は学習、半分は遊びということで特別変わった様子はないが、以前はやっていた予習をこのころはあまりやらないようになった。中学校の先生も定期的に来てくれているらしいが会話している様子はないし、そのときの様子などをCIには伝えようとしない。

CIはこうした年明け以降の長男の全般的な閉じこもり傾向に直面して、かえって仕事に一生懸命打ち込むようになり、長男に対してあまり声をかけることはしなくなった。CIはまた、「去年の今頃（長男が小学校6年生の3学期で、不登校状態が定着し始めたとき）の方がもっとつらかったです。」とも述べている。他方、「手遅れになるのではないかと？自分は仕事に逃げているのではないかと？」と自問自答し、「またこんな感じなのか。また自分自身が長男に対して過ちをするのではないかと思っています。」というような不安も表明している。

Coは年明け以降の長男の後ろ向きの変化に直面して再び不安と混乱のただ中に投げ込まれたCIの気持ちを共感的に受け止め、長男の気持ちを理解し焦らず変化を待つという夏以降のCIの長男との関わりのある方を認めるとともに、不登校状態を自力で克服するまでにはいろいろな段階を経過するのであり、その中には一見後戻りしたかと思えるようなことも起こりうることを説明し、あせりや無力感が生ずるかも知れないが、長男に対してはこれまで通りの対応の仕方を継続するよう心がけることを助言した。

第8回（200x+2年3月13日）

長男の継続面接日と同日であり、相談室まで長男と同道してきたが、気分が悪いということで担当者とも相談の上長男の面接は中止し、母親面接のみ行った。

前回の面接以降2月下旬のことであったが、長男が誘われてある友だちの家に行ったら、Aという長男とは小学校1年生以来の友だちもたまたま遊びに来ていて、久しぶりに再会することとなった。以前2軒となりに住んでいて長男が昨年9月に引っ越しをしてから久しぶりに会った親友である。CIによれば、Aとは以前から行き来していて長男にとっては気を遣わないうでいられる唯一の友だちで、他の友だちとはつきあいの深さが異なるという。その後Aから電話があると長男は喜んで出かけるようになった。Aは長男の他の友だちとは違って、自宅に遊びに来たときにはCIとも娘（姉）とも気軽に話をするし、長男にとってAは何か特別な存在で、「こころを開くことができる。」相手であると考えている。久しぶりの親友との交友関係の復活によって、長男はひと頃に比べて表情に明るさが戻り、いろいろな活動を積極的に行うようになってきた。Coが、＜偶然とは言え、ちょうどタイミングよく仲の良かったA君と再会できたことが、このころ閉じこもりがちであったお子さんを再び外の世界に向かわせたのでしょ。＞と述べると、CIも安心した表情でこのところとげとげしさが薄れてきたこと、落ち着いた様子が見られることなど長男の様子について語った。

また、この前3回忌があったときに長男の様子を見てみると、あらためて亡き父親と雰囲気や顔立ち、仕草などがそっくりであることに気がついた。「とくに“ふわっとした優しさ”は夫と共通していると思います。それは“ほっとするような一言を他人に対して言える”ということで、他人への配慮に優れているということです。」。これまでの面接の過程では母親の口から長男の性格や気質の面で優れていると思う点や長所を指摘する発言はほとんど見られなかったことを考えると、長男のよい点を正当に評価しようとするCIの姿勢を強く感じ取ることができた。

続いてCIは、夫の墓の問題について経緯を説明してくれた。夫との死別以降のCIが、自身の課題として長男の不登校の問題以外に3つの課題（債務の処理および夫の墓をどこにするか、転職・異動）を抱えていることについては、これまでのCIの発言からCoが推測していたことであるが、今まではとくにCIの方から詳しく説明されることはなかった。Coは、ここに来てCI自身の課題のうちの1つについて彼女自身の口から悩みを語りかけてきたことは、彼女自身がこれらの問題をどのように解決していくかが自分のこれからの生き方を決定していく際に重要であるという認識をこの段階で持ち始めていることの現れであろうと解釈した。

最後に借金問題が片づいたことが報告された。まだ精神的負荷（知り合いの保証人に対する申し訳なきなど）は残っていて、心情的にはつらいというが、長男がひと頃の引きこもってしまった状態から抜け始めていることを実感しているせいか、表情は明るい。

第9回（200x+1年4月17日）

最初に、長男の2年生への進級が認められ、新しい担任が明日来訪してくれることになり、CIは一安心したこと、さらに長男もそのことを素直に喜んでいるとの報告があった。

Coが最近の長男の家庭での様子について尋ねると、CIはよくしゃべり、表情も明るい嬉しそうにいう。「(相談室に)行って来れたからだと思います。何か全身が軽くなった感じがします。」とも語った。長男は前日から明日が相談室に通う日であることを母に告げ、期待しているようなそぶりを見せるという。家の中で一人でぶらぶらしていることについて娘(姉)からきつく叱られたときには、これまでは反論することができなくて部屋に閉じこもってしまっていたが、最近娘(姉)から小言を言われても動じないようになっているとCIから見た長男と娘との関係の様子が説明され、長男を好意的に見ている母親の姿勢が伝わって来る。

また、CIは長男に対する肯定的な気持ちの具体的現れとして以下のようなエピソードを聞かせてくれた。母親のよく行く美容院の美容師さんから、「表面的には幼稚に見えるけれども、あの子と話すと、あきないね。どこで観察しているのかわからないが、ものごとをよく見ている。」と言われたそうである。母親はそれを受けて長男のことをCoに「遠回しに気づかせるような言い方をする子なんです。どこでそういう見方をするのかかわからないけど・・・」と肯定的な口振りで言う。

また、長男はCIと共通するものを見つけたいと感じているのか、疲れている母親を見て気遣うような発言や一緒に行動したいという気持ちをCIに伝えることが多くなってきたという。

「去年の秋以降旅行にも行かない、また行けないようになっているので、そのことを十分にわかった上で長男なりの対応なのかなとも思います」。何となく母子間に気持ちの交流ができつつあることを示すエピソードであるように思われた。

CI自身が抱えている課題の一つである3回忌のことについて、「いよいよ節目が近づいて来

たと思います。自分としてはこの3回忌を一つの区切りとして新たな生活に臨んで行きたいと考えています。」と述べ、新しい段階への出発点として位置づけたいという決意表明であるように思われた。また、この発言を契機としてここ2年間苦しんできたCIの胸の内をさらけ出し、「この2年の間何をしてきたのか軌跡がないように思えます。わからないうちに月日だけがたってしまったように感じます。長い2年間で、『また今日も生きなければ』という気持ちだけで進んで来たと思います。」と述べ、さらに、そのような気持ちを抱えて必死に生きてきたのは自分だけではなくて長男自身でもあったということをCIが母親として理解しつつあることを、「自分だけでなく長男自身もそういう日々を重ねてきたのかも知れません。『なぜこんなことに?』という気持ちと『勝手に自殺した夫に対する恨みの感情』がこれまで自分を支えて来ました。」「このところそうした気持ちは薄れ、寂しいという気持ちを強く感じるようになりました。自分がそこまで思うのであれば、長男はもっと寂しいはずだと思うのです。」「自分のそういう気持ちの変化を長男は敏感に察知してくれていると思えるようになりました。」などの発言で示している。夫の死とそれに伴うさまざまなトラブル（借金・債権者との関係、夫の実家との関係、自分自身の仕事の問題）の中で、わき目もふらずひたすらその日その日を必死に生きてきたのが、ここにいたってようやくこの2年間の自分の気持ちを整理することができるようになったことをCIは自覚し始めている。

そうしたCI自身の気持ちの変化が、長男に対する見方を肯定的・受容的な方向に変化させ、「自分と長男とは裏表の関係にあると思うようになりました。」というように、内容は異なっても、CIと長男が苦しさを感じていたことについては共通していることを得心できたことに結びついていると考えられる。「自分も気持ちを表に出せるようになったし、会社でも思ったことを言えるようになり、長男に対して「どこかに認められない部分があった」と述懐し、「長男が学校に行けない状態であるのも、そうした行動という形で自分に反応していたんだなと思います。長男もそういう行動を取ることで自分で自分を苦しめているところがあると思います。」というように、自分の気持ちを分析すると同時に長男の内面の状態を思いやり、推測し、わかってあげたい、認めてあげたいというように、CIの長男に対する見方や感情に転換が生じたことがうかがわれる。

さらに続けてCIが仕事上出会うさまざまな人々の家族関係の問題を引き合いに出して、「私が仕事としている介護の現場でも、家族関係の病理が反映しているという事例をこれでもかと言うほど日常茶飯事に目の当たりにしています。そうした事例を体験する中で、娘が自分に『これ以上悪いことはないから。』と述べた意味がよくわかるようになりました。」「介護の現場で出会う人々の抱える恨みや悲しみの感情やそれでも家族がいることによって生ずる癒しの実態に直面することで、生きているだけでまだいいと思えるようになったし、そういう中でも救われるもの、すがるものがあるんだということが実感できました。仕事をしながらエネルギーをもらったと思えるようになりました。」「この2年間を総括できる自分があることを発見してよかったと思います。自分は残された家族を一生懸命支えてきたが、実は家族によって自分が支えられてきたのではないかと実感できるようになりました。長いスタンスで自分たちが置かれた状態を見つめることができるようになったと思います。」と述べ、夫の死後2年という時間を経て、自分自身と長男をはじめとする家族共同体のこれまでを総括し、今後の生きる指針へとつなげていこうとする姿勢を自覚し、新たな家族の再生に向けて積極的に、前向きに取り組んでいこうとする決意が表明された重要な面接機会であったと思われる。

【第Ⅳ期 長男像の再構成と今後の展望（第10回～第12回）】

第10回（200y年5月15日）

前回以降の長男の様子について、最近体調を崩し本日も面接を受けたくないといっているという。また連休明け以降A君（第8回参照）のところ遊びに行くのをばったりとやめてしまったといい、やや長男の心理面の状態が思わしくないのではないかと気遣う様子である。

それでもCIは、最近の長男の様子で「特筆されること」として、長男が自発的にウオーキングを始め、「2ヶ月かけてやせたい。」といって朝や昼間に近くの公園まで出かけるようになったこと、「ゲームはもうやり尽くした。外に出た方がやりたいことがある。」と言い出して、積極的な様子が見られるようになったことを挙げている。

連休最終日に夫の弟の家族がこちらに来て泊まった。義弟夫婦とCIとが法事のことと相談をしている中身を聞いていて、長男は「このごろBさん（最近CIのことを名字で呼ぶことが多いという）は、他人に対して悪口を言うことが多いんじゃない？」などと言ってCIに対して批判的な発言を行った。また、以前は「僕はお母さんにとってどんな存在なんだろう？ じゃまになっているのかな？ お母さんの悩みのうち70%は僕だね。」とか、「僕は生まれて来ない方がよかった。」などと言うことがあったが、今では「以前はそう思っていたけれども、今はそんなふうには思わない、仕事もしているしね。」とか、「少しは休んだらどう？」（CIが債務や法事の問題で苦しんでいることを理解して）「お金は天下の回りもの。」「僕がこうしているからお母さんも疲れるんだよね。」「働いているのは僕のためだよ。」などと言うようになった。

これらの発言を聞いて母親は、このように母親の苦労を考慮することができるようになった長男の変化を心から喜ぶとともに、こうした一連の長男の言動の変化を体験し、その意味をCIなりに解釈する中でこれまでの長男への対応を振り返り、自分なりに総括を行っているかのような発言が見られた。たとえば、「夫の自殺後自分が何をすればよいかわからない状態が続いていました。思えば長男に対して自分が言ってはならないことを言ってしまったのかも知れません。夫のことが片づかないのに長男までこんな状態になってしまって・・・というような言葉を長男に対して投げかけていたのかも知れません。」と述べ、夫の死、借金返済、夫の実家との関係その他経済面での処理などを一度に抱えてたいへんであったこれまでの振り返り、これらの問題が一通り決着・結論が出せそうな現在にあつて、この段階でおそらく初めて自覚的に母親としての長男へのこれまでの対応のあり方について吟味・検証し始めている様子がかがわれた。

Coは、＜中学校2年生への進級が認められたことを家に訪ねてきた担任教師を通じて知ったことが自信や自己への信頼感を高める方向に働いている＞可能性を指摘し、＜そのことが母親に対する対等な話の仕方や態度に示されているのかも知れません。＞と述べた。CIも新しい担任と話し合うことができたことや英語が大事と言われて自発的に勉強するようになったことを述べ、家庭教師や相談室に通うことの意味づけも長男なりに明確にされているように見えると言い、CIから見て長男が何か「軽くなったような感じ」がするという。

第11回（200x+1年6月12日）

6月に入ってから長男の体調が思わしくなく、ずっと高熱が続いていた。剣道の塾には来週の水曜日から行くつもりでいて、ジャージを用意するなど本人は行く気になっている。塾長の説明では相当厳しいらしいので行けるかどうか心配である。実は以前見学したときに、練習が

とても激しいし、初心者でもおとな扱するような道場との印象を持った。送り迎えをしようかと提案したが、長男はそんなものは必要ないと言い張った。

CIはこれまで長男に対しては、「やりたいことをやらせても続きませんでした。スイミングもちょっとだけしか行きませんでした。」というように、持続性に欠けるとの思いが強く、今回の剣道場への加入に際しても「大丈夫かな？」と心配そうである。長男自身は、剣道場が同じ学区にあって同級生が通っていることや、指導者たちに学校に行っていないことを聞かれることなどは覚悟している。CIがこれまで長男に対して持ち続けていた「幼稚、ひ弱、心配症、小心者、何をやっても長続きしない。」といったイメージと、いろいろ聞かれることはあっても剣道をやってみたいという長男の決意との間のズレにとまどい、「発散したいのかな？」とか「家での退屈さをもてあましてるように思えます。」というように、現在の長男の心境にも一定の理解を示しつつも、なお大きな不安を抱えている。Coは、本人の決断を尊重し、継続することに意義ありと伝えたが、母親の不安が解消されたわけではない。

CIは、「このごろ長男は父親の死のことを忘れつつあるんだなと感ずることがあります。」と言い、たとえば、2匹目のハムスターが死んだとき、前回はすごく取り乱したが、今回はむしろ冷淡で、同じように埋葬したが今度は死骸にさわろうともしない。自分(CI)のミスでハムスターが死んでしまったのだから、「お母さんがやればよい。」などと言って、第3者的な振る舞いをした。また、以前は葬式場面の映像を見てショックを受けて、身体を震わせていたことがあったが、現在ではそのようなことはない。「死への客観視ができるようになったように思えます。」とCIは長男の変化を受け止めている。

長男が父親の死を克服しつつあることを実感したもう一つの例は、この夏のお盆に夫の遺骨を納めに行くという話をしたときに、「ドライになったあの人(父)はいいです。」と茶化したような口調でやんわりと拒絶したことである。

最近の長男の様子を見てCIは、「言葉で表現しなくても、息子は少しずつ変わってきているのかなと思います。少しおとなになってきたのかも知れませんが、これまでは同級生に比べて2、3年遅れているように思っていたが、だんだん成長してきたと感ずるようになりました。」と述べ、長男の成長を自分なりに認識していることを表現している。また、「いつもにこにこしていて、夢見るバクのようなのです。いつまでもこのままという気もするのですが・・・。」とも述べ、長男の変化がゆっくりであることに対する若干の不満足感やいらだちも表明している。

CIはまた自分の仕事を7月にやめるつもりであり、できたらパートへの身分切替を望んでいるという。夫の死以降休む間もなく働き続け、さらに「債務の問題や夫の実家との問題もあってわき目もふらずひた走りに走ってきたような感じがしています。今も1日12時間労働で、しかも土日出勤もあることで疲れ切ってしまいました。」「新しい職場となるとプレッシャーもあるが、働き口はいくらでもあります。この辺でほっとした空間を持ちたいという気持ちでいます。ここに来てCoに話を聞いてもらえるのも自分としてもほっとした時間が持てて嬉しく思っています。」と語った。

第12回 (200x+1年7月10日)

「友だちとのつきあいも最近復活したようで、そのうち一人は毎週電話をかけて来ます。その子は小学校時代からの友だちで少しきついことをする子で、長男はとてもしつこいいけないし、振り回されているようなところがあります。遊び相手がいないので長男に電話をかけてくるよ

うですが、長男はこのごろは適当に誘いを断るようになって来ました。また、他のもつと気が合う友だちには自分から電話をかけることができるようになりました。先週あたりから自宅にも遊びに来るようになり、また誘われたときには嬉しそうに出かけて行きます。友だちとの関係で積極的な姿勢を感ずるようになりました。」と述べ、長男の友だちとの関係の持ち方が以前とは違って来たことをCIとしても実感していることがわかる。

家庭では落ち着いている様子で、生活のリズムでもできあがっていると言う。CIと一緒に何かしたいようで、ごはんを作ったり、散歩に出かけようと誘ってくる。娘（姉）とも一緒に行きたがる。CIとしてはやはり長男は寂しいのかなと思うし、肩をもんだりしてくれるのを見ると、甘えたい気持ちもあるのかなと思う。

また、「相談室からの帰りは長男も開放的な気持ちになるせいか、いろいろ真剣なことや内面にある重要な考え方をぱっと出すことがあります。」と述べ、前回の面接終了後に将来のことが話題になったとき、自分（長男）の将来設計として「僕は、お父さんが亡くなった年齢までの人生だ。」と言い出した。続けて、「僕はお父さんの仕事を継ぐものだと思ってきた。」と言い、長男自身の父親に対する愛情や信頼感、がんばっているお父さんというイメージを持ち続けていたことをCIとしてもあらためて理解・確認した気持ちになった。しかし、その直後に「それが突然なくなった。無になった。」と言うのを聞いて、長男が今抱えている心理面のつらさ・困難さを理解したようである。CIはこのエピソードを紹介して、長男が父親の死の事実をきちんと受け止めることができるようになってきていることを感じているが、同時に「無になった」「僕のころには空洞がある。」といったような喪失感がまだ当時のままで、いまだに埋められきっていないことに気がつき始めている。

最後に、「ここ2、3ヶ月の長男の落ち着きは今までになかったことです。自分たち家族はやっともとの穏やかな生活に戻りつつあるように思えます。長男の顔も以前のいい顔に戻ってきたと思います。」と述べ、長男や自分自身のこのところの心境の変化について肯定的、前向きにとらえている。夏休みには、夫の生前に計画していた北海道への家族旅行に出かける予定であるという。この旅行が、夫の死以降の本人が体験してきたさまざまな解決策を見いだしにくい困難な問題に立ち向かい、解決あるいは一区切りを付けて新たな家族の人生への旅立ちに重なることと思われる。この段階でCIが一つの重要な区切りとしたいという意味を表明し、CoもCIが抱えていた諸問題に対する前向きな姿勢を実感することができたので、本面接はこの時点で終結することとした。

考 察

(1) 母－息子関係の変化－適切な距離感の再構築

面接過程における長男の行動や性格特徴に関する母親としてのとらえ方や見方、長男イメージに関する変化の様子を振り返ってみると、単純に否定的な見方をしていたのが、次第に肯定的な面が存在することに気づき始め、あるいは再認識し、長男の不登校状態を受容するとともに、内面的世界を理解しようとする態度がCIの内部で醸成されていった様子をうかがうことができる。そして、こうした長男像の変化が、CI自身が抱えてきた困難な課題をCIなりに整理し、その決着や解決のために前向きな姿勢をとることと連動し、長男の不登校と母子関係の再構成の問題をも包含する形でCIのこれからの人生を展望する作業に深く関わっていると想

定することができる。

小学校高学年から中学校入学の時期に登校しぶりや不登校状態になった児童生徒の内的世界を理解するときの一つの有力な視点としてあげられるのは、両親との心理的距離である。それは、発達の初期からの親子関係とくに母子関係の歪みが、思春期を迎えて登校できない状態や家の中への閉じこもりの遠因となり得ることが知られているからであり(若林, 1984), また, この時期は親からの心理的独立を達成していくことが重要な発達上の課題であり, その過程で親の持つ価値観との対立や親からの干渉の忌避などさまざまな局面で親との対決が求められるからでもある。

同時に, 子どもが児童期から青年期へと向かう時期は, 親から見ても子どもとの関係のあり方を再構築することが求められる時期であり, 親はある種の緊張感を伴って子どもへの接し方や子ども像の転換を迫られることになる。このことは, 子どもが児童期から青年期へ移行する時期は, 親子双方にとって互いの間の関係の持ち方や心理的距離を再調整し, より現実的な形で親概念や子ども概念を再構築する時期として特別に重要な意義を持っていることを示す。

本CIの場合, 不登校状態を呈している長男に対する面接の初期段階の評価は, 「幼稚」「小さな子のように」「がまんできない」「集中力や持続力がない」など概して否定的であり, かつ一面的に過ぎるようなところが見受けられた。確かに長男本人は体格が小柄で, 童顔かつ色白, さらに小太り気味でもあるために, 一見実年齢よりも幼くは見える。その点でCIの長男に対する見方は外見から印象づけられる事実を述べているだけであるかのようにも思われるが, この段階でCIは幼稚さを強調することで, 長男が他の中学生とは異なって登校することができない状態にあることを自分なりに納得しようとしていたのではないかと考えられる。すなわち, CIは長男の不登校の原因をその幼さに帰属し, その見方が正当であると認めるためにことさらに幼稚な息子という否定的な長男像を維持し続ける必要があったと解釈できる。このことは第2回面接で, CIから見た長男の印象についての発問に対して, いらだちと情けなさを表情に示しつつ, 即座にしかも断言的な口調で数々の実例を挙げながらCoに長男が幼稚であることの説明を行ったことに現れている。したがって第1期の段階においては, CIは長男のリアルな姿に基づくというよりも否定的な評価のバイアスのフィルターを通して長男の姿をとらえようとし, その結果, CI本人の主観的意図とは別に現実の長男との間に大きな心理的距離が置かれた状態にあったと思われる。

それに対して面接の進行とともにCIの長男の見方が次第に肯定的な内容に移り変わっていった。これは, 第1期段階のCIの余裕のなさに由来する長男に対する一面的な否定的評価の縛りが解けて, 自分だけが苦しいのではなく長男自身も苦しんでいることに気づき, 長男の気持ちに寄り添うような姿勢への転換が見られるようになったことが関係している(第II, 第III期)。“ふわっとした優しさ”(第8回)という表現などは, まさに母親が長男の特徴をよくつかんでいることの証であり, 本CIと長男の組合せならではの表現である。このように, 初期段階の拒否と突き放しから寄り添いへと母子関係の変化が見られたことは, この第II, 第III期がCI-長男関係の再接近に当たる時期であったことを象徴している。

その後長男は相変わらず不登校の状態が続き, ときに閉じこもりや落ち込みの様子を見せることもあったが, CIは第1期のような否定的な一面的評価に戻ることなく, 不安や心配を自覚しながらも少し距離を置いた視点から長男の行動を眺めている。第3期に入る頃からCI自身の課題が少しずつ解決の方向に向かいつつあったことが自らを取り巻く状況を客観的に眺め

るゆとりを生んだこともあって、CIは長男の成長を実感し、長男の不登校が彼自身の選択の結果であって決してマイナスばかりではないこと、長男なりにおとなに向けて変化しつつあることを認める姿勢を維持し続けている。長男の内面の理解とおとなに向かつての成長を実感することで、CIは長男との間に適切な距離をとることに成功し始めている。

このように、CI-長男間のほどよい心理的距離の取り方を模索し、この母子ペアそれぞれが置かれた状況に適合した適切な関係を再構築していったことが、より好ましい状態への改善に結びついたといえよう。それは、夫あるいは父親の突然の死という衝撃からCIと長男それぞれが立ち直る過程と重なり合っている。CIは夫の死に伴うさまざまな困難を伴う課題と長男の不登校の同時進行という事態に直面し、当初の混乱状態から次第に自らを取り巻く課題を客観視し、整理し、次第に受け入れていった。こうした作業にとって、長男の内面の理解と適切な心理的距離の取り方を自ら探り出すことができたことが、CI自身の前向きな生き方を形作るのに重要な貢献をなしたといえるであろう。

(2) 保護者を支えるということ

本ケースにおいては、当初CIが持っていた長男像の現実的修正への手がかり作りと母親自身のライフタスク達成への援助を目指して、Coはつねにパーソンセンタード・カウンセリング (Mearns, D. & Thorne, B., 1988) の立場から受容的に接し、共感的理解と肯定的関心を旨として対応してきた。

臨床面接の過程でCoが出会う可能性のあるもっとも大きな問題はCI側が防衛的になることであり、これにより面接が予想通りに順調に進むことが妨げられる (Harsen, M. & Van Hasselt, V., 1998)。とりわけ本ケースの場合、主訴である長男の不登校以外にCIにとって重みのあるさまざまな課題が同時並行的にCIに押し寄せていたので、とりわけ暖かい受容的な面接の場作りが重要であった。このことは、本ケースのような、主訴となる対象の近親者に対するコンサルテーション面接の場合でも同様である。むしろ、主訴の対象者が抱える心理的困難の改善を図るためには、周囲のとくに家族の共感と受容が必要な場合が多いことを考えると、主訴の対象者とその家族などキーパーソンが抱えている課題状況を構造化し、来談者が今後主訴の対象者との間で何をどのように振る舞えばよいのかの手がかりを見いだす場として面接場面が有効に機能することが必要である。傾聴や受容、共感的理解、肯定的関心などはコンサルテーション面接の場を機能させていくためにCoが備えておくべき重要な姿勢であることがあらためて確認されたといえよう。

面接の初期段階においてCIとCoとの間の協働関係が成立したことが、その後のCIの長男像の変化や適切な距離感の定位を引き出すとともに、CI自身が抱えていた諸問題の解決に向かつて前向きな構えと意欲を自覚するところまで繋がったと考えられる。この間CoはつねにCIが話すことにじっくりと聴き入り、うなづきや注視などノンバーバル・コミュニケーションをも援用して、肯定的な関心を持続していることを伝えることに務めた。こうしたつねに変わらない態度を持ってCIと接し続けることが、生産的なCI-Co関係の確立にとって重要であることを本ケースは示している。

本ケースのように困難を抱えた子どもを持つ親を対象とするコンサルテーション面接では、以下のような事項が好ましいCI-Co関係を樹立するために必要である。まず第1に、肯定的・受容的な雰囲気のもと、CIがときに否定的内容に傾いた自らの生の感情を表出しても何ら問

題がないと思えるような面接の場を提供することである。

第2に、主訴対象者ではなくCI自身が抱えている悩みや混乱、手詰まり観などをCoは的確に読み解き、対話の中で自分自身の在り方に注目させ、CI自身が自らが本来持っているはずの力や資源の存在への気づきを促すことで、状況の改善や課題の解決に向かって取り組もうとする意欲を引き出すことである。そのためには、CoはCI自身の感情を映し出す鏡のような役割を果たすことが求められる。CIはCoへの語りかけを通して自らが持つ情緒的混乱や悩みを一度表出し、続いてCoからの発言をあらためて受け取って再解釈する。その過程では、内面にあるものを外部化する作業が含まれ、このことによってCIは主観的な感情内容を客観視する機会を得ることとなる。このように、自ら表出した感情がCoとのやりとりの中で外部化されることがCIの問題への気づきを促進すると考えられる。

第3には、こうしたやりとりの継続によって、面接開始当初に来談者が抱え込んだ（と主観的に感じている）困難が、視点を転換させることでそのうちの多くはつねに背負っていなければならない重い荷物などではなく、脇に置くなり他の人に受け渡すなりすることで軽くすることが可能であるという見方を採用することを可能にするという点である。

以上のように、“暖かい雰囲気作り”、“気づきの促し”および“荷下ろし作業”をCIとCoとが共同作業を続けながら構築して行くことがとくに保護者に対するコンサルテーション面接に求められるのであり、それらの重要性が本ケースにおいても確認されたといえる。これらの事項は、学校教育現場で展開されている保護者を対象とする教育相談活動にとっての基本部分を構成するであろう。

文 献

- Harsen, M. & Van Hasselt, V. 1998 Basic Interviewing. Laurence Erlbaum Associates. (深澤道子 (監訳) 2001 臨床面接のすすめ方 日本評論社)
- Mearns, D. & Thorne, B. 1988 Person-centered counseling. London, Sage. (伊藤義美 (訳) 2000 パーソンセンタード・カウンセリング ナカニシヤ出版)
- 若林慎一郎 1984 登校拒否 若林慎一郎(編) 児童期の精神科臨床 金剛出版 pp.236-261